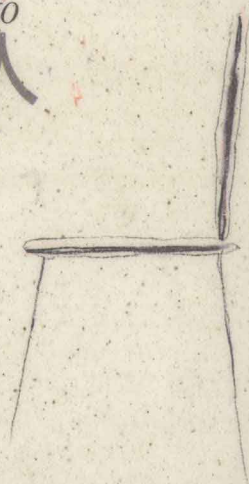
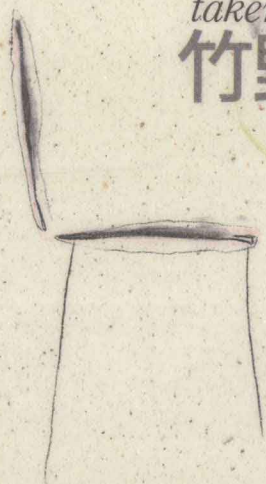


山田さん日記



純愛映画

*takeno masato*  
竹野雅人



山田さん日記

純愛映画



*tareno masato*

竹野雅人

福武書店



竹野雅人（たけの まさと）  
一九六六年、東京に生まれる。八九年三月、法政大学経営学科卒業見込。八六年、「正方形の食卓」で第五回「海燕」新人文学賞を受賞。

純愛映画 山田さん日記

一九八九年一月一〇日 第一刷印刷  
一九八九年一月一四日 第一刷発行

定価 二二〇〇円

著者 竹野雅人

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二一三―二八  
〒〇二 電話(〇三) 二二〇一―二二三  
振替口座(東京) 六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 加藤製本

(落・乱丁本はお取替え致します)

目次

純愛映画

7

山田さん日記

93

正方形の食卓

177

装  
丁  
菊  
地  
信  
義

純愛映画

山田さん日記



純愛映画





1

彼女は石鹼の匂いがした。彼女に向かって台詞を言う段になってから、どうしてそんな事を思ってしまうのだろう。本多由喜男は焦燥した。彼女に対する想いと緊張とを意識すまいとすればするほど、身体はがちがちになりそして神経の一カ所が尖ったように敏感になる。自分の頭の中は余程錯乱してしまっているのだろう、焦りは由喜男の頭の中を一層、パニック状態にさせた。彼女への台詞をしくじらないように、そんな意識が急迫して由喜男の気を尖らせるのだ。

ただ暑いだけの初夏の日差しをもろに受ける、五階建ての校舎の屋上で二人して手すりにもたれて外の景色を眺めていた。

由喜男はそんな自分への焦心の意識を吹き飛ばすように、甲高い声で、大きく息をすいこん

でから彼女への台詞を棒読みではじめた。

「ようやく……」

「え……」彼女は由喜男の方を振り返った。

「ようやく、好きになりそうな女の子と出逢ったよ」

彼女は由喜男から視線を逸らし、俯いた。そして言ったか言わなかったか分からないくらいのか細い声で、応えた。「そう……」

由喜男はそんな彼女の態度に構わず、台詞を続けた。「今度、その子に好きだよって、言うつもりなんだ」

「……そう……」彼女は由喜男から離れるように二、三歩手すりに沿ってゆっくりと歩いた。

由喜男はそんな彼女の動作をぼんやりと眺め、その場に立ち尽くしたまま、少し声を上げて彼女に向かって言った。

「でも、君よりはずっと落ちるよ」

彼女は小さく間をとってから顔を上げた。

「フフ、失礼よ、その女の子に対して」

「でも好きなんだ」

その台詞に彼女は、はっとした表情をつくってみせた。そして再び顔を落とした。「……そうね」下を向いた状態をつくった笑顔を上げて由喜男に見せたが、それはすぐに消えていって

しまった。かわりに、かなしい表情が浮き上がっていた。「そう……」

由喜男は、じっと彼女のことを見据えた。

伏し目がちの彼女は、ゆっくりと由喜男の方に視線を合わせた。

しばらく、凝固したようにそれは続いた。——監督の、はい、という合図が出るまで。二人はその掛け声で、視線を外し、カメラの方に目をやった。

三脚に据えられたカメラから目を外したカメラマンも兼ねる監督の浦野は、じっと二人をそのまま見詰めていたが、やがて数歩後ろに下がりそのまま腕組みをしてうーんと、唸り始めた。由喜男と可来未也子はそんな監督を見守った。監督は何やら考え込んでいたが、意を決したようにきびきびした口調で言った。

「キープ。だめだ今日は、終わり。片付けよう」記録係の遠山月子は、はっとして監督に向かって、「はっ、はい。キープですね」と応えて、慌てて手にしていた記録のノートに書き込みをした。助監督である久米は監督が言い出す前に、既にその事を察知してしまっていたようにカメラを三脚から外し、三脚の脚を無言のうちに収納し始めていた。撮影が行き詰まると長考に入ってしまう監督の癖を、久米はよく理解していた。

じっと監督を見ていた由喜男だけが納得の行かない様子で浦野の元へ詰め寄った。「おい待てよ、今の、だめなのかい」

浦野は腕組みをしたポーズのまま、ぼそつと言った。

「だめじゃないけど……やっぱりだめ」

「どうして」

「ちがうんだ」

「どう、ちがうんだよ」

浦野はちらりと由喜男を一瞥したが又同じ台詞を繰り返すだけだった。「やはり、ちがうんだ」それきり、黙り込んでしまった。

どうしても納得しきれず、煮え切らない気持ちのままであつたが、でもこれ以上浦野に詰め寄つても無意味だと悟り、そばにいた月子に力ないため息をついてみせてから、由喜男は可来未也子の方を振り返つた。

可来未也子は何よりまずこの屋上の暑さにまいてしまつてしまつていいのか、俯いたまま顔を上げようとしなかつた。彼女の後輩にあたる月子が氣付いて、そんな未也子の元に近寄り、大丈夫ですか、と心配そうに声を掛けると、可来未也子は笑顔をつくつて応えた。由喜男も彼女の元に行き、何かを言いたかつたが、できずにいた。彼女が俯いているのは暑さのためだけではないことに、氣付いていたし、それに第一自分の方にしたって、彼女に向かつて何一つ氣の利いた台詞を言うだけの余裕なんてなかつたからだ。

その日の八ミリ映画の撮影は、それで終わりになつた。

\*  
\*

校舎と塀に挟まれた細長い裏庭にある部室棟の映画研究会の部室は、まるで蒸し風呂のよう  
で由喜男と久米は入る前に躊躇をしてしまった。学期末のテストが間近いこともあって、機材  
やら荷物やらを両腕一杯に抱えこんだ二人が帰ってきて、部室には誰もいなかった。

荷物を置くと由喜男は早速、窓を開けて部室の中の風通しをよくしてから、椅子を三つ並  
べ、ああ疲れたあ、と悲鳴めいた声でそこに横になった。何より精神的に、くたくただった。

対照的に久米は帰ってくるなり、何はさておき椅子にきちんと坐って、カメラの手入れを始  
めた。監督自身はアルバイト、女の子二人は用事があるとかで、ロケ場所である第一校舎の屋  
上からそのまま部室に戻ってきたのは二人だけだった。黙々と手入れを続ける殊勝な後輩を由  
喜男はぼおっと眺めていた。

「今日がめでたいめでたいクランク・インで、四時間半、日曜日丸一日潰してこの炎天下の中  
で延々と撮影をしたというのにワンカットすら撮れずじまいってのは、どういふことなんだよ  
……」由喜男はだらだらと進展しない浦野の撮影に、先行きが不安で、思わずため息が出てし  
まった。「一体どうなってるんだい、浦野監督の凝り様は……」

その日が、浦野監督による八ミリの自主映画撮影班の初めての撮影日であった。だが、シナ  
リオの順番どおり始まったこの撮影のファーストシーン、シーン一カット一である由喜男と未

也子の会話の場面で、何十回にわたる撮影は全てNGになってしまい、一日かけても終わらなかったのだ。結局、後日また最初から撮り直しということになってしまった。由喜男はほとほと疲れ果てて、苛立っていた。乱暴に自分の鞆からコピー製の手書きのシナリオを取り出すと由喜男は、やおら引き剝がすかのように一枚一枚頁をめくっていた。

それに対し久米の方は極めて平静に、作業の手を休めず黙々と手入れを続けていた。由喜男はそんな久米に不服そうに言葉を投げ掛けた。「こんな調子じゃあ、十月の学園祭なんかに間に合いつこないぜ。絶対」

「多分……」急に久米が口を開いた。「自分の思っている通りの画えじゃなかったんだと思います、監督さんの、ね」

「分かっているよ、そんなこと。だけどさ、実際同じことを何回も何回も繰り返して演じている身となればしんどいんだよ、これって。駄目なら駄目でどこがどうおかしいのか、きちんと説明するのが監督の役割だろ。浦野は何も指示しないまま、何度も何度もフィルム回してNGゴッにしているだけじゃないか」由喜男はシナリオを閉じた。「大体この映画のタイトルからして安易すぎるよ」由喜男はシナリオの本の表紙いっぱい以太書きで書き付けられたこの映画のタイトルに目が行くと、苛立ちをそちらにぶつけた。「『純愛映画』という名の恋愛映画……。安易だよ。それに撮影も安直だよ。レンジイ映画を本気で撮ろうとすると、とてつもなく恥ずかしいものなんだと思うんだよ、だから余程気合い入れて表現する側の監督が状況なりの説明を綿

密に役者にする必要があるはずだよ」由喜男自身、昨年、二年生の時にレンアイ映画を撮ろうとしたが、役者が恥ずかしがって演技をするどころの話ではなかった事があって、そのことは実感済みであった。「ただ台詞を読めって感じで突き放しちゃうだけじゃ、駄目なんだよ」とシナリオを久米を前にかざして見せた。

「きつと、あそこの場面は、演技を出すんじゃないかって、演技を待つために、延々とフィルムを回し続けたんじゃないでしょうか」

「何だよ、それ」丹念にカメラのレンズにエアブラシをかけ続けている無表情の久米が何を言いたいのか、由喜男にはよく分からなかった。「おいおい、俺達は学生映画やってるんだぞ。素人役者の部員使ってそこまで演技云々を要求するのかい」

「そうですね。そうかも知れないけど、でも……」めずらしく従順な久米が言葉を返してきた。「本多さん、あの場面……、シーン一カット一はですね、主人公の男の子が昔付き合っていた女の子とばったりと会ってしまった場面から始まるこの映画の冒頭のシーンなんでしょ。台詞にはないけど、振られた女の子に対し、その子を今でも好きなんだけれどどうまく口にできないっていう微妙な主人公の気持ちを表さなくちゃいけないんですよ」ちらりと久米は由喜男を見てから、続けた。「それは台本通り台詞を読んでいったって決して表現できる訳はないし、演技指導したからできるといふことではないと思います」

「そんなもんかねえ……」シナリオをめくりだした由喜男はそれっきり黙り込んでしまった。



強く言い過ぎたかな、と久米がそんな沈黙に強ごわと由喜男の方へ顔を向けると、由喜男は突然口調を変えて間の抜けた明るい声で言ってきた。

「やつは本当に恋をしたことないな。浦野は。でなきゃこんな恥ずかしいストーリーの物語、作るはずないもんなあ。うんうん、そうだよ。絶対、やつは正しい恋をしていない」

久米はそれにほっとして、作業に戻った。「じゃあ、きちんと正しい恋をしていた本多さんは、恥ずかしくて演技にならなかつたっていうことですか」

何も言い返してこないの、久米は顔を上げた。由喜男は下を向いたままである。

「でもさあ、そんなに……、俺は感情がこもってなかつたのかなあ……」急に口調を落としてそうぼそつと呟いた。由喜男にどぎまぎとしてしまった久米は、慌てて言葉を足した。

「え、あ、いや、本多さんの演技が下手だとかどうとかいうんじゃない、難しいんですよ、ここは……」

由喜男は、シナリオの表紙の、タイトル文字を指でゆっくりとなぞっていた。「じゅんあい……純愛ねえ……」ゆっくりと自分の方に顔を向けたので久米はびくっと構えてしまった。

「なあ久米よ……」由喜男は力なく微笑んだ。「演技をするってのは、難しいんだよなあ、実際」